

抗生剤（抗菌薬）の使い方

嬉しいことに読者の方からご質問を頂きました。「抗生剤を処方される時とされない時があります。違いは何ですか？」今日は抗生剤の正しい使い方について。抗生剤、正確には抗菌薬と言います。菌（細菌）をやっつける薬です。体の中には 600 兆の菌がいて、消化の手伝いをしたり、病原菌の侵入を防いでくれたりします。たまに防ぎきれなかった病原菌が体に悪さをして、病気をおこします。この際、抗菌薬の出番となります。覚えて欲しいのは抗菌薬ですから、細菌にしか効果がない、ということです。

一方、発熱、咳、鼻水、いわゆる風邪。原因のほとんどはインフルエンザを含めウイルスです。相手が細菌ではないので、抗菌薬は効きません。熱で抗菌薬が必要なのは中等度以上の中耳炎か溶連菌感染症（院内検査ですぐ診断出来ます）ぐらい。熱が高いから念のために、こじらせないように、鼻水がドロドロだから、等の理由で抗菌薬をのむ必要はありません、退治する菌がいませんから。事実、抗菌薬を投与した、しないで、発熱、鼻汁の期間に変化はなく、中耳炎や肺炎への進展を予防する効果はないとする沢山の報告が出ています。又、抗菌薬をのむことにより体の役に立っている菌がいなくなります。消化のバランスが崩れ下痢をおこしたり、免疫のバランスが崩れアレルギーを起こしやすくなったりします。

まとめますと、①風邪に抗生剤は効きません。②処方された抗生剤は指示通り服用しましょう。すぐ熱が下がったからやめた（中途半端な使用→耐性菌を助長）、熱が出たので家にあった抗生剤をのんだ（不適切な使用→診断の遅れ）、はなしです。③「手洗い、ワクチン」予防がやっぱり大切。